

台北の歴史を歩く 士林地区の歴史を巡る（1）

片倉 佳史

台湾の首位都市として君臨する台北市。その市域人口は263万を誇り、文字通り、台湾の中枢として機能している。その台北の歴史をたどる旅。今回は台北市北部に位置する士林地区の歴史を辿ってみたいと思う。

観光客も多く訪れる士林地区

台北市の北側に位置する士林は現在、台北市士林区に属している。観光客には夜市（ナイトマーケット）の存在で知られ、ガイドブックなどでも必ずや紹介される行楽スポットだ。当然、知名度も高く、連日多くの外国人旅行者を見かける。MRT（新交通システム）淡水線を利用して、台北駅からわずか10分あまり。市内各地との間を結ぶバス路線も頻繁に運転されており、交通至便なエリアとなっている。

ここは旧名を八芝蘭（はっしらん）といった。もともとは平埔族（平地原住民）が暮らしていた土地で、凱達格蘭（ケタガラン）族の居住地だったとされている。この八芝蘭という言葉は「温泉」を意味するものと言われ、16世紀に漢人住民が台北盆地に移入してきた後に漢字表記が与えられた。

この温泉がどこを示しているのかは不明だが、北投温泉や紗帽谷温泉一帯を示していると推測される。なお、ケタガラン族は漢人に同化することでアイデンティティを失ない、消滅したとされる。いくつかの地名には痕跡をたどることができるものの、文化的遺構というものはほとんど存在しない。

現在、台北市は全12の区に分かれている。その中で士林区は最大の面積を誇っている。もともと、士林は台北市の管轄地域ではなく、日本統治時代は台北州七星郡士林街という別個の行政区域

だった。戦後、1967年7月に台北市に組み込まれ、士林区となった。

古くは基隆河の水運もあり、士林には広範囲な地域から物資が集まり、繁栄を見たという。しかし、「分類械闘」と呼ばれる出身地によって結束した集団の戦闘や、河川の氾濫が頻発したことなどを受け、その発展は停滞し、繁栄は台北に移っていった。

それでも、淡水線で台北や淡水と結ばれていたことや、北投や草山（現陽明山）、三角埔（現天母）などへの乗り換えの拠点として機能していたため、交通の要衝としては機能していた。常にある程度の賑わいは誇ってきた町である。

士林地区の玄関口・剣潭

士林地区の玄関口となっているのはMRT淡水線の剣潭駅である。ここは士林夜市の最寄り駅で、乗降客も多い。モダンな外観が自慢の高架駅で、個性的な駅舎としても注目されている。



士林夜市（ナイトマーケット）の様子。圧倒されるばかりの人出となっている。

淡水線は日本統治時代初期に敷設された路線である。台北と淡水を結び、全通は1901（明治34）年8月20日に遡る。縦貫鉄道の全通よりも早いことに注目しておきたい。

淡水線の敷設工事は1900（明治33）年5月10日に始まり、同年10月25日に開業式典が挙行されている。当時、急務だった縦貫鉄道の敷設に当たり、この路線を資材運搬に利用することが考えられたようだが、淡水港は土砂の堆積が激しく、大型船の接岸は難しかった。結局のところ、運搬の窓口となったのは基隆港となり、淡水港の復活はなかった。淡水線を利用した物資の輸送も幻に終わっている。

注目を払いたいのは、この淡水線を利用して、様々な試みが実施されていたことである。たとえば、台北と北投温泉を結ぶ直通運転の行楽列車が運転されていたこと。そして、台北駅から出る列車は半数が淡水行き、半数が新北投行きとなっており、30分ヘッドのパターンダイヤが実施されていたことも特筆されよう。この時代、すでに「待たずに乗れる」というフリークエントサービスが行なわれていたのは驚きに値する。

また、当時は「自動客車」と呼ばれたガソリンカーが導入されていた。蒸気機関車全盛の時代、早くもガソリン動力車が持ち込まれていた。言う



近代的な路線に生まれ変わった淡水線。本数も多く、なくてはならない庶民の足となっている。

までもなく、台湾ではここだけのものだった。

現在、淡水線は新交通システム（MRT）として生まれ変わり、典型的な通勤通学路線となっている。現在の線路は従来の淡水線を廃止したうえで、その敷地を利用して敷設されている。そのため、列車は以前とほぼ同じ場所を走っていると言えるが、沿線に往年の面影を感じ取ることはできない。

消えた「宮の下駅」

剣潭駅が設けられたのは戦後のことで、その歴史は浅い。日本統治時代、駅は現在の剣潭青年活動中心という公共宿泊施設の脇辺りにあり、「宮の下（みやのした）」を名乗る簡易乗降場だった。言うまでもなく、台湾神社の参拝客の利便を図って設けられた駅である。

連載一回目と二回目でも触れたように、台北市内から台湾神社へ向かう際、参道となっていたのが現在の中山北路であった。明治橋と呼ばれた橋で基隆河を跨いでいたが、この橋は戦後、孫文にちなんで中山橋と呼ばれていた。現総統の馬英九氏が台北市長だった時代に解体され、将来的には復元されることがアナウンスされていたものの、実行に移される気配はない。

表参道に対し、宮の下駅からは裏参道が台湾神



日本統治時代に撮影された士林駅の様子。珍しいガソリン動車がみられる。



中国式の装飾が施された剣潭駅の様子。

社まで続いていた。しかし、戦後を迎え、台湾神社は廃社となってしまい、参道の意義はなくなってしまった。そして、「宮の下」という駅名も日本を連想させるということで、中華民国政府に嫌われた。1945年10月25日に「剣潭」と改称され、その後、廃止の憂き目に遭ってしまう。

淡水線は一旦、廃止という形で営業を終え、1997年3月28日、近郊型通勤路線として生まれ変わった。その際、剣潭駅は現在の場所に移転した。現在は中国風の装飾を配した個性的な駅舎がランドマークとなっている。淡水線はローカル線情緒に満ちたのどかな車窓で知られていたが、これはすでに過去のものとなっている。宮の下駅も痕跡を残してはいない。

知られざる官弊大社台湾神社の遺構

剣潭青年活動中心の正式名称は中華民国青年救国団剣潭青年活動中心である。通称「救国団」とも呼ばれるこの青年組織は蔣経国によって、1952年10月31日に設立された。「反共」を主軸に置いた政治思想工作を目的とする組織である。中華民国が台湾に逃げのびた後には様々な団体が設立されたが、ここは中でも規模が大きく、社会的影響力も大きいものだった。青年活動中心も救国団の運営下に属する公共施設だった。

この敷地内に旧台湾神社の遺構が残っている。知る人も少ない「忘れられた遺構」というべき存在である。それは台湾神社が所有していた貯木池。規模の大きな神社に特有のものであった。

台湾神社は剣潭山の陵線上に設けられていた。本殿は壮麗を極める神明造り。三基あったという鳥居は阿里山産のヒノキが用いられた。台湾はヒノキの産地だったこともあり、神社の用材にも多く用いられていた。台湾神社も例外ではない。山岳部で切り出された木材は台北に運び込まれ、その際、まずは虫殺しをするために、貯木池に浮かべられた。

貯木池は剣潭青年活動中心の敷地内に「池」として現存している。周囲には植え込みが整えられ、公園のような雰囲気である。随所に中華風の置物が並んでおり、日本らしさは微塵も感じられない。これが日本統治時代の神社関連施設であることも知る人は少なく、まさに知られざる存在である。

また、中山北路に面した緑地に福正宮と呼ばれる廟がある。この近くに、台湾神社の狛犬が残っている。戦後に移設されたものだが、国民党政府の独裁政権時代も傷つけられることはなく、原型を保っている。台湾鎮護の社として設けられた神社のものらしく、大きく、立派な造りである。



中山北路に面した緑地に置かれている旧台湾神社の狛犬。台湾神社の用材のために設けられた貯木池もその姿をとどめている。

士林の代名詞「夜市（ナイトマーケット）」

士林の名を広く知らしめているものに夜市（ナイトマーケット）の存在がある。外国人旅行者にも人気のある一大観光地で、ガイドブックでは定番の散策スポットとして紹介されている。実際に訪れてみると、確かに熱い鼓動を感じずにはられない。

士林夜市のメインストリートとなるのは MRT 劍潭駅にも近い大東路である。ここはいわゆる商店街であり、日中でも店は営業しているが、夕方からはこれに加え、路地の中央にも屋台が出る。ここではアクセサリーやキャラクターグッズ、衣料品などが山積みになっており、ショッピングが楽しめるほか、屋台料理や軽食も売られており、人通りが絶えない。

台湾政府観光局や台北市政府（市役所）はこういった場所を外国人旅行者に積極的にアピールしている。衛生管理を徹底し、案内表示を設ける。そして、パンフレットなどを作成し、利便性を図っている。かつてはトイレが不衛生で、かつ数が少ないことが問題視されていたが、これも克服されつつある。

しかし、一方で、雑多な感じが独自の風情を生み出していた台湾夜市の情緒は見る影もない。圧倒されてしまいそうな活気は健在だが、整然として人間味のない現在の雰囲気は失望してしまう旅行者が多いのも事実である。

また、観光地化が進み、屋台料理の味にも変化が見られる。伝統に裏付けされた味わいや、老舗特有のこだわりは年々見られなくなっており、利益重視の姿勢が目につくようになって久しい。また、この場合、客層に若年層が多いため、味にうるさい美食家は少ない。そんなこともあって、美食スポットとしての評価は決して高くはない。

さらに、2009年から大挙押し寄せるようになった中国人旅行者の激増によって、彼らを当てにし

た店が増えているという現実も知っておきたい。特に顕著なのはフルーツを扱う屋台である。味の良さで知られる台湾産フルーツの人気はもちろんのこと、安全面で信用できない自国産の農産品を嫌った中国人旅行者が「台湾水果(台湾産のフルーツ)」を謳った店に団体で押し寄せる。そのため、値段も上がり、市価の倍程度の値が付けられたりする始末である。

夜市はどのように生まれたか

夜市をはじめとする屋台街の形成過程も気になるところだ。通説となっているのは、廟や寺の前に露店が集まったのが始まりと言われている。つまり、参拝にやってきた人を目当てに屋台が並び、賑わうようになったというのだ。

確かに、ちょっとした規模の寺廟なら、きまっ



隙間を見つけることすら難しい週末の様子。長らく台湾を代表する行楽スポットだったが、ここ数年、徐々に変化を迎えつつある。



激増する中国人旅行者をターゲットにした台湾産フルーツの専門屋台。各地でトラブルが絶えない中国人旅行者だが、台湾側の商業モラルの低下も問題視されている。

て周囲に屋台が並んでいるし、夜市を訪れてみると、ほとんどの場合、廟を擁している。派手な屋台群に埋もれていることが多いが、そぞろ歩きを楽しむ人々は結構な確率で廟の前で立ち止まり、手を合わせている。やはり、庶民文化と信仰は切っても切れない縁なのだろう。

一般的には、夜市が台湾で本格的な形成をみたのは戦後であるとされている。敗戦によって日本人が引き揚げた後、中華民国国民党政府とともに外省人が移り住んだのは周知の事実だが、夜市文化はその後に誕生し、発展したというのが定説である。

しかし、士林夜市をはじめ、いくつかの夜市については状況が異なる。たとえば、士林夜市の場合、庶民信仰の場である慈誠宮という廟が発祥の地だが、露店街が形成されたのは日本統治時代のことだったという。つまり、終戦前にはすでに、参拝客を相手に屋台が並び、商店街の様相を呈していたというのだ。

士林の場合、台湾総督府が慈誠宮と向かい合う位置に公共市場を設けた。これにより、買い物客と参拝客が相乗効果を生み出し、屋台街が徐々に発達していった。昭和時代を迎える頃には士林で最も賑やかな地区になっていたという。その後、屋台街が移ることになるが、それまでの間、市場と廟、そして屋台街は常に同体で士林の繁栄を支えてきたのである。

煉瓦造りの公有市場—士林市場

慈誠宮は主神に「航海の女神」として崇められている媽祖を祀ることから、「士林媽祖廟」とも呼ばれている。創建は1796年に遡り、地域信仰の場として機能してきた。この地は淡水河にも近く、水運の拠点であり、古くから物資の集散地となっていた。



公有市場は廃墟然とした姿になっていたが、建物は台北市が指定する古蹟となっていたため、取り壊されることはなく、保存対象となっていた。改修前の様子。

現在、市場の建物はすでに修復工事を終え、生まれ変わっている。工事期間中は長らく2メートルほどの柵に囲まれていた。そのため、立ち入ることはおろか、内部をのぞき見ることもできない状態だった。周囲はひっそりとして、かつての賑わいを想像することもできなかった。

旧士林公有市場は1910（明治43）年に開かれ、1915（大正4）年に竣工している。建物は赤煉瓦造りだったが、入念な地震対策が施されていたと伝えられる。

遠くから眺めると、市場の屋根の部分には通気口が設けられているのがわかる。台湾総督府は半世紀に及んだ治世の中、一貫してこういった公共市場の衛生管理を徹底管理していた。

ここに日本統治時代の遺構が横たわっていることは、地元住民を含めて知られていない。しかし、戦前に公共市場として設けられ、その後、90年近くにもわたって人々の暮らしを支えてきた老建築の存在は、やはり士林を語る上では欠かせないものと言えるだろう。

（士林前編終わり。次号に続く）